

発表要旨：クプサビニ語 (Kupsapiny: 南ナイル、ウガンダ) の associated motion (AM) を表すのに使われる構文 (例：「こちらにしながら電話を見続けた」で、動詞「見た」に継続的移動の接尾辞と空間ダイクシスの接尾辞を付ける) は、他の言語の AM を表す構文に関して先行研究で言われているのとは違う以下の特徴を持つことを報告する。(i) 単純なシステムである、(ii) AM に特化されていない、(iii) prior motion (e.g. ‘come and look’) > concurrent motion (e.g. ‘look while coming’) > subsequent motion (e.g. ‘look and come’) という階層 (Levinson & Wilkins 2006, Guillaume 2016) の反例である、(iv) 構文が表すのが AM であるかどうか、AM のうち concurrent motion と subsequent motion のどちらかは動詞のタイプ・意味に依存する、(v) この構文は連続・反復の概念を常に表すので、AM がアスペクトから独立した文法的範疇であるとは言い難い。

## 1. はじめに

1.1 本研究の目的 本発表は、クプサビニ語の associated motion (AM) を表すのに使われる構文が、他の言語 (特にオーストラリアと南アメリカの言語) の AM に関して先行研究 (e.g. Koch 1984, Wilkins 1991, Levinson & Wilkins 2006, Guillaume 2013, 2016, Belkadi 2015) で言われているのとは違う特徴を持つことを報告する。AM は「動詞で表される行為に関係付けられた移動」(Koch 1984: 23) (e.g. ‘eat while coming’, ‘come and eat’, ‘eat and come’) で、行為 (e.g. ‘eat’) (または状態・状態変化) に動詞を、移動 (e.g. ‘come’) に文法的形態素 (特に、動詞接辞) を使う。したがって、非移動動詞に移動の意味を持たせるという機能を果たす。Wilkins (1991) と Guillaume (2017) は、AM はテンス・アスペクト等とは独立した文法的範疇であると言う。しかしクプサビニ語で AM を表すのに使われる構文はそうとは言えない。さらに他にもクプサビニ語の構文が他の言語での構文とは違う特徴があることを指摘する。これらの特徴の要因について考える。

1.2 クプサビニ語の文法的特徴の概略 クプサビニ (Kupsapiny/Kupsabiny, /kupsapinj/ [k<sup>h</sup>upsabinj] または /kùssapinj/ [k<sup>h</sup>ùssabinj]) 語 (ナイル・サハラ大語族、ナイル語族、南ナイル、カレンジン; ISO: kup) はウガンダ東部のケニアと国境にあるエルゴン山の北と西の麓のセベイで、セベイ族 (/sàpɪŋʃak/ [sàbɪŋʃak]) により話されている。セベイ族の人口は 2014 年国勢調査によると 289,456 人で、ほぼすべての人がクプサビニ語を話す。サバオト (Sabaot) はこの言語のケニア側の方言である。他のカレンジンの言語には以下のものがある: Kipsigis (Toweett 1979), Nandi (Creider & Creider 1989), Keiyo, Terik, Tugen, Marakwet, Pokot (Pökot/Pökoot), Akie (König et al. 2015), Okiek (Ogiek)。クプサビニ語とポコット語はウガンダとケニアで、オキエク語はケニアとタンザニアで、アキエ語はタンザニアで話されているが、これら以外の言語はケニアのみで話されている。クプサビニ語の話者のほとんど (特に 60 歳代以下) はウガンダの公用語の一つである英語を第二言語として話す。特にセベイ東部ではスワヒリ語も話す人が、西部ではマサバ語 (ギス語; バントゥー J.30) も話す人がいる。

クプサビニ語は膠着言語だが、ある程度融合が見られる。接頭辞と接尾辞の両方を使い (名詞には主として接尾辞、動詞には接頭辞と接尾辞)、主に主要部標示をする。基本語順は VSO で、語順は比較的定まっているが、主語と目的語の名詞句のタイプにより、VOS も起る。前置詞を使い、名詞の後に修飾語が来る。トーン (´: high tone, `: low tone, 無表示: mid tone) による形態的格標示をし、主語に使う格と目的語に使う格のどちらが無標か、トーンだけでは判断できないが、目的語に使う格の形式がより多くの状況に使われるという点で機能的に無標であり、有標主格型の形態的格標示をするとみなすことができる (Dixon 1994, König 2006, 2008)。

クプサビニ語の名詞と動詞には接頭辞と接尾辞のスロットがある (Montgomery 1966, O’Brien & Cuyers 1975)。動詞の接頭辞としては、時制-主語の人称・数、分詞-主語の人称・数、ムード、否定があり、動詞の接尾辞としては、継続的移動を表す接尾辞、空間ダイクシス、経路 ‘from, via, at’ を表す接尾辞、道具・随伴者/物、目的語人称・数、アスペクト、自動詞化、再帰、逆使役がある。‘from, via, at’ を表す接尾辞と道具・随伴者/物の接尾辞は applicative としての機能を果たす。定動詞は時制-主語の人称・数の接頭辞またはムードの接頭辞を取る。不定動詞は分詞の接頭辞を取り、動詞連続の構文で最初の主動詞以外に使われ、いくつもの不定動詞が続くことが多い。不定動詞の時制は主動詞の時制による。主語の人称・数は時制と融合した接頭辞として表される。定動詞の形式が人称によって変化しない動詞があるが、3 人称のみ語尾が異なる動詞もある。

## 2. 先行研究

特にオーストラリアと南アメリカの言語の AM を表す構文に関してなされている記述として以下のようなものがある。

[1] Levinson & Wilkins (2006) と Guillaume (2016) は AM の構文について (1) の二つの含意的階層 (AM を表す形式は階層の一つを表せるのであればその左側も (すべて) 表せる) を提案している。

(1) (a) 主語の移動 > 目的語の移動

(b) 行為の前の移動 (prior motion) (e.g. 'Go then/to VERB') > 行為と同時の移動 (concurrent motion) (e.g. 'do VERB while going') > 行為の後の移動 (subsequent motion) (e.g. 'VERB then go')

(1a) によると、AM の構文は主語の移動を表し、目的語の移動は表さない場合があり、目的語の移動を表すことができるのであれば、主語の移動も表すことができる。(1b) によると、AM の構文は (i) prior motion のみを表し concurrent motion と subsequent motion を表さない場合、(ii) prior motion と concurrent motion を表し subsequent motion を表さない場合、(iii) 3 つのタイプそれぞれを表す場合がある。(Levinson & Wilkins (2006: 534) は concurrent motion の説明で 'do VERB while going' としているが、階層では 'do' の継続性を示すためか、移動が主たる事象の要素であるということを示すためか、'Go while VERBing' としている。実際にどちらなのかは [2] と関連する問題であり、検討の余地がある。)

[2] Levinson & Wilkins (2006) と Guillaume (2016) は、Talmy (1985, 1991, 2000) の移動表現の類型論の枠組みにおける動詞枠付け (verb-framed) と付随要素枠付け (satellite-framed) のどちらのパターンにおいても移動 (移動の事実 'fact of motion') は動詞の語根に現れるが、AM の構文では、移動が動詞の語根で表されず文法的形態素 (特に動詞接辞) で表されるという AM の特異性について述べている。しかし構文が AM に特化したのではなく移動動詞にも使われる場合には移動動詞の語根も移動を表すので、このことはそのような構文全般には明らかに当てはまらないはずである。さらには AM は Talmy のイベント統合の類型論で扱われるようなタイプの複合イベントかどうか、動詞で表される行為や状態・状態変化と移動のどちらが主要なイベントの要素かという問題がある。

[3] オーストラリアと南アメリカの言語に関しては、AM は複雑な文法的範疇であると言われてきている。特に空間ダイクシス、経路のタイプ、移動と動詞で表される行為の時間的關係 (さらに、言語によっては何が移動しているか) の組み合わせによる区別をする。例えば、Wilkins (1991) は Mparntwe Arrernte に 14 の接尾辞があることを報告している。Guillaume (2016) が調べた南アメリカの 66 言語では 6~13 の AM の接尾辞によって区別をしているという。

[4] Wilkins (1991) と Guillaume (2017) は AM はテンス・アスペクト等とは独立した範疇であり、概念的・意味的な範疇というだけではなく文法的範疇であると言っている。Wilkins (1991) によると、Mparntwe Arrernte の場合、AM の接尾辞は以下の点でテンス・アスペクト等とは独立した文法的範疇であるということである: (a) テンス・アスペクトのような他の屈折接尾辞とは違うスロットに起る、(b) テンス・アスペクトの接尾辞とは違い空間ダイクシスの動詞には起らないというような制限がある、(c) 他の屈折接尾辞と共に起る、(d) 空間的な概念を表す。

以上のように、AM の構文の研究は、移動が表されている構成素の文法関係 (主語か目的語か)、移動と動詞が表す行為の時間的關係、構文の特異性、意味の区別の複雑さ (特に経路のタイプ)、テンス・アスペクト等からの独立性に着目してきた傾向がある。(本研究の対象外だが、言語接触による拡散との関係で地理的な分布に関する記述もある (e.g. Wilkins 1991, Guillaume 2016)。) それに対し、AM のマーカー自体が持つかもしれない (空間移動を伴わない) テンス・アスペクトの意味についてはあまり記述されていない (Belkadi 2015 に少し記述があるが、他では実際 AM のマーカーの使用は移動事象に限られているのかもしれない: e.g. Wilkins 1991)。それから、AM と (Talmy の類型論で扱われるような複合事象としての) 移動 (translational motion) との關係が明らかにされていない (しかし Belkadi 2015 にいくらか記述がある)。さらには、地域としてはオーストラリアと南アメリカの言語を中心に研究がなされてきて、それ以外の地域の AM の構文の深い研究は多くない。

南ナイルの言語は連続した動詞接尾辞の組み合わせによって AM が表されることが報告されているが、過去の研究 (e.g. Kawachi 2011, 2014, Kiebling & Bruckhaus 2017) は空間移動を表す用法のみに注目してきていて他にどのような用法があるか等についての記述がないし、他の地域の言語での AM の構文との比較をしていない。

Belkadi (2015) は、アフリカの言語 (アフロ・アジア、ニジェール・コンゴ、ナイル; ナイルの言語として扱っているのは西ナイルの Pāri 語) を中心に、ダイクシス方向辞 deictic directional (品詞としては、動詞接辞、パーティクル、クリティック、前置詞を含む) が文法化して AM に使われるようになった事例を主に文献から収集し、様々な点から分析している。ただ、(3.1 で見るように) クブサビニ語の場合は、ダイクシス動詞接尾辞だけを AM に使うことはできず、継続的移動を表す接尾辞を必要とする。

### 3. クブサビニ語の Associated Motion のデータ

3.1 空間ダイクシスの接尾辞 クブサビニ語の移動動詞は空間ダイクシスの接尾辞 (以下で、ダイクシス接尾辞) が付いて空間ダイクシス (以下で、ダイクシス) の対照をなす。ダイクティック・センターは、ダ

イクシスの動詞では話し手または聞き手だが、ダイクシス接尾辞では通常は話し手である。表 1 の I-a, I-b, I-c にあるように、ダイクシスに中立（以下で ‘neutral’）の形式は  $-\emptyset$ 、‘hither’ の形式は  $-u$ 、‘thither’ の形式は  $-te/-e$  である。（いくつかの例外がある。‘thither’ の形式の  $-e$  は短母音から成る一音節の語幹に使われるようであるが、厳密にどのような環境に起こるか定かでない。）動詞によって ‘hither’ vs. ‘thither’ の対立を示す（‘neutral’ の形式がない）ものも、‘neutral’ vs. ‘hither’ の対立を示す（‘thither’ の形式がない）ものも、‘neutral’ vs. ‘hither’ vs. ‘thither’ の対立を示すものもある。人称にかかわらず同じ形式を持つ動詞もあるが、ダイクシス接尾辞が付いた動詞は主語が 3 人称の場合のみ語尾が異なる（第 2 節）ので、この表では主語が 1 人称または 2 人称である場合に動詞が取る形式のみを示している。3 人称では ‘hither’ の  $-u$  が落ち、‘thither’ の  $-te$  が  $-ta$  または  $-to$  になる。表 1 で、TPN- は時制・主語の人称・数の接頭辞（TNS/PRS.NUM）を表す。ダイクシス接尾辞の後には、applicative の接尾辞  $-é$  ‘from, via, at’,  $-e$  ‘with’（道具・随伴者／物）、未完了相の接尾辞または強調の接尾辞  $-u$ （‘hither’）/ $-i$ （‘thither’）、逆使役接尾辞  $-akay$ 、再帰接尾辞  $-key$  などが来ることがある。

表 1：クプサビニ語の移動動詞に { I. ダイクシス接尾辞が付いた形式、II. 継続的移動を表す接尾辞（‘along’ 接尾辞）とダイクシス接尾辞が付いた形式 }（主語が 1 人称または 2 人称の場合）

	I. TPN-V-neutral/hither/thither			II. TPN-V-along-hither/thither	
	I-a. ‘neutral’	I-b. ‘hither’	I-c. ‘thither’	II-a. ‘along hither’	II-b. ‘along thither’
‘cross boundary’	—	TPN-mùŋ-u	TPN-mùŋ-te	TPN-muŋ-nóó-nu	TPN-muŋ-tóó-te
‘descend’	—	TPN-rék-u	TPN-rèk-te	TPN-rek-tóó-nu	TPN-rek-tóó-te
‘run’	TPN-lapat- $\emptyset$	TPN-lapat-u	—	TPN-lapat-óó-nu	TPN-lapat-áá-te
‘march’	TPN-sàrep- $\emptyset$	TPN-seréép-u	—	TPN-sèreep-óó-nu	TPN-sèreep-áá-te
‘roll’	TPN-mùkurkúúr- $\emptyset$	TPN-mùkurkúúr-u	TPN-mùkurkúúr-te	TPN-mùkurkuur-óó-nu	TPN-mùkurkuur-óó-te
‘pass by’	TPN-tìl- $\emptyset$	TPN-tìl-u	TPN-tìl-é	TPN-tìl-óó-nu	TPN-tìl-áá-te

3.2 継続的移動を表す接尾辞（‘along’ 接尾辞）とダイクシス接尾辞の連続（継続的移動を表す接尾辞を伴わずに）ダイクシス接尾辞は移動動詞のみに付く（ただし、知覚動詞に付いて fictive motion を表すことがある）のとは違い、本研究のトピックの中心であるこの二つの接尾辞が連続した形式は、移動動詞以外の動詞を含むほぼすべての動詞に付く。英語からの借用語（例：koolinkèn ‘call’, rispontinken ‘respond’）にも付く。付くことができないのは、以下の 2 つの動詞だけのものである：čàra ‘injure, hurt’（その逆使役形 čàrà-kay ‘become injured, become hurt’）、pùn-u (hither)/pùn-te (thither) ‘arrive’。（オーストラリアや南アメリカの言語の AM の接尾辞とは違い、ダイクシスの動詞にも起る。ただし、 $-oo-nu$  (along-hither) と  $-oo-te$  (along-thither) のどちらも起る čò ‘come’ とは違い、wo ‘go’ は  $-oo-te$  のみと起る。また、この 2 つの接尾辞の組み合わせの使用は随意的だが、‘walk’ を表す動詞の一つ wostóóte は  $-oo-te$  を常に含んでいて、wost-óó-nu という形式はあるがめったに使われない。）

継続的な移動の接尾辞は  $-aa/-oo$ （‘along’ と注釈してある；以下で、‘along’ 接尾辞）という形式を取る。

（ $-aa$  と  $-oo$  のどちらかを使うかは動詞によることが多いが、方言による違いであることも、自由変異であることもある。）‘Along’ 接尾辞は常にダイクシス接尾辞を伴って使われる。‘Along’ 接尾辞と起る時にダイクシス接尾辞は、主語が 1 人称または 2 人称である場合には、‘hither’ の形式は  $-nu$ （母音の連続を避けるために  $-u$  の前に  $-n$  が挿入されたと考えることができる）、‘thither’ の形式は  $-te$  で、主語が 3 人称の場合は最後の母音がなくなり、それぞれ  $-n$  ‘hither’ と  $-t$  ‘thither’ となる。語幹の終わりの音が  $t, k, p$  以外の場合（動詞によってはこれらに加えて  $l, r, ŋ$  以外）、‘along’ 接尾辞の直前に ‘hither’ の形式には  $n$  または  $t$  が、‘thither’ の形式には  $t$  が挿入される。したがって、‘along’ 接尾辞とダイクシス接尾辞の組み合わせは表 2 の通りである。1 人称または 2 人称の例を表 1 の II-a と II-b に挙げている。

表 2：クプサビニ語の ‘along’ 接尾辞とダイクシス接尾辞が連続した形式

	主語: 1 人称または 2 人称	主語: 3 人称
‘hither’	TPN-V-(n/t)óó-nu（まれに TPN-V-(n/t)áá-nu）	TPN-V-(n/t)óó-n（まれに TPN-V-(n/t)áá-n）
‘thither’	TPN-V-(t)áá-te/TPN-V-(t)óó-te	TPN-V-(t)áá-t/TPN-V-(t)óó-t

‘Along’ 接尾辞とダイクシス接尾辞の連続は、動詞が移動動詞（translational motion verb）であるか、そうでないかにより、振る舞いが異なる。移動動詞の場合は、その意味にダイクシスの概念および移動の継続性という概念を加える。移動動詞の中でもそれ自体が意味として持っている経路のベクトルにより意味が異なってくる。ベクトルが FROM である場合は動詞で表された移動が接尾辞の連続の移動よりも先に起こる（例：(2A) の kù-mwey-òò-t）。そうでない場合は動詞で表された移動と接尾辞の連続の移動が同時に起こる（例：(3)）。AM ではないが、動詞が表す行為と（ダイクシスを含む）移動の関係は、前者は subsequent motion、後者は concurrent motion とみなすことができる。

- (2) kii-taŋááy piikò kápusà kot (A)kù-mwey-òò-t yáát  
 D.PST.3-suffer people.NOM very.much until PTCP.3-escape-along-thither DM  
 piikò, ku-mwíy aláak akóy wook (B)kù-míjĩš-oo-t yáát  
 people.NOM PTCP.3-escape other up.to forest PTCP.3-live-along-thither DM  
 piikò (C)ku-táŋaŋ-áá-t kùcakee yootò páka paantáŋ.  
 people.NOM PTCP.3-suffer-along-thither since that.time until now  
 ‘People suffered very much, and as a result, they (A)escaped and went along, and others escaped up to the forest; the people (B)have been living there and (C)have been suffering since that time until now.’ (Conversation 2018-8: C. Francis & C. Eunice)

- (3) ... kà-mii kùù-cùùt-òò-n-u cept = ááke mééset le, ...  
 T.PST.3-exist PTCP.3-pull-along-hither-IPFV girl.DEF.SG=cerain table DM  
 ‘A certain girl was (continuously) pulling a table along this way, and ...’ (CAL Discourse Subproject, Clip #21 UMO2\_cups.mp4: Participant ID 8, C. Ziporah)

この構文で表されるイベントで移動しているのは主語であり、目的語ではない。(3) で主語の女の子はテーブルを引き続けるので、目的語のテーブルも移動しているが、ボールを蹴り上げて人は動かずにボールだけが飛んで行くような場面 (NINJAL(-Kobe) Motion Project, Clip A9-38) にこの構文は使えない。

移動動詞以外の動詞の場合は、動詞が表す継続的な行為や状態・状態変化と共に起こる主語の AM (主語が体の部位を表す名詞の場合はその所有者の AM) を表す。物体操作動詞 (object-maneuvering verbs、様々な putting verbs と taking verbs、ただし ‘put’ を含まない) や着脱動詞 (clothing verbs) では、主に subsequent motion が表されることが多く (例: (4)) (ただし場合によっては concurrent motion の解釈も可能)、それ以外では concurrent motion が表される (例: (5), (6))。

- (4) ... à-toor-óó-t-i kiššéérok, ...  
 PTCP.1SG-put.on.head-along-thither-IPFV skin.DEF.PL  
 ‘... I put animal skins on the head, and went along, ...’ (Conversation 2018-8: C. Francis & C. Eunice)

- (5) ... kii-ye čá = tile kààrìmanìk čò  
 D.PST.3-when come=pass.by young.man.DEF.PL.NOM those  
 kà-mii kwoom-oo-t-í mùyèmpèènik.  
 T.PST.3-exist PTCP.3.eat-along-thither-IPFV mango.DEF.PL  
 ‘... when those young men came and passed by, they were (continuously) eating mangoes as they went along.’ (Pear story 20: C. Esther)

- (6) ... à-kas-e coorwéé-nuu jìmpjimen-óó-n-u ...  
 PTCP.1-see-IPFV friend-1SG.POSS smile-along-hither-IPFV  
 ‘... I saw my friend (continuously) smiling as s/he came along, ...’ (NINJAL(-Kobe) Motion Project, Clip B8-04: Participant 5, C. Patricia)

#### 4. クプサビニ語の Associated Motion に使われる構文の特徴、その特徴から言えること、その特徴を引き起こす要因

クプサビニ語の AM に使われる構文の特徴で注目すべきなのは以下の点である。その特徴から言えること、およびその特徴を引き起こす要因が何であるかに関して推測できることを、わかる範囲で同時に述べる。

まず第一に、Levinson & Wilkins (2006) と Guillaume (2016) が AM の構文について提案している (1) の二つの含意的階層のうち、クプサビニ語の構文は (1a) の妥当性を支持していると言えるが、(1b) に関してはその反例になっている。クプサビニ語の構文は concurrent motion (しかし ‘do while coming/going’ というよりはむしろ ‘keep doing while coming/going’ ; 例: (5), (6)) を表すことが多く、subsequent motion (例: (4)) を意味することもあるが、prior motion を表すことはない。さらに、Ross (2017) によると (1b) のうちの AM の二つのタイプが表される場合はその二つは prior motion と concurrent motion または prior motion と subsequent motion であるというが、クプサビニ語の構文の場合 AM に使われる構文が表すのは concurrent motion と subsequent motion である。(ただ、まったく違う構文で (5) の čá = tile (come=pass.by) のように ‘come’ または ‘go’ を表す動詞が別の動詞にクリティックとして付き prior motion を表しているように思われる場合がある。)

このことから、まず (1a) の含意的階層は問題がないかもしれないが、(1b) の含意的階層は普遍的ではないと言える。Ross (2017) の仮説も誤っている。これらがクプサビニ語の構文の場合 AM に特化したシステムでないというのが要因かどうかはさらに他の言語を見てみなければならない。

第二に、Guillaume (2016) は、Talmy (1985, 1991, 2000) の移動表現の類型論のどのパターンとも違い、移動の事実が動詞の語根で表されず文法的形態素で表されるという AM の特異性について述べているが、Talmy の類型論は、移動の経路を中心にした主要な枠付けサブ・イベント (framing event) と移動の様態や



例えば、(8) でかつてはお金を借してもらいに回るといふ行為には空間移動が伴わなければならなかったが、現代では電話で頼むことができるので、この文はこの文脈では空間移動を伴わない行為の継続というアスペクトの意味としての解釈が通常なされる。このような他の例として、動詞に ‘announce (news)’, ‘spread (the rumor)’, ‘ask for opinions’ を使ったものなどがある。

[D] 連続・反復の概念を常に表し、concurrent motion の場合動詞の行為が連続・反復して起ることが、subsequent motion の場合移動が連続して起ることが表される。また、この構文はイベントが一度起るといふ解釈に加えて、イベント全体が反復されるという解釈(例：(5) で *kà-mii kwoom-oo-t-í mùyèmpèènik* ‘they were eating mangoes as they went along’ の部分だけをとった場合、このイベント全体が繰り返されるという解釈)も可能である。筆者が知る限り、これは他の言語では報告されていない現象である。

## 5. 結論

クプサビニ語の AM を表すのに使われる構文は、これまで報告されてきた他の言語の AM の構文とは違う特徴があることがわかった。いくつかの特徴はこれまで言われてきた仮説に反するものであり、その要因を推測できそうなものがある。これまで研究されてきたオーストラリアや南アメリカの言語の AM の構文と同じシステムとみなせるのかどうか検討の余地がある。

略号一覧 DEF: definite, DM: discourse marker, D.PST: distant past, INDEF: indefinite, IPFV: imperfective, NOM: nominative, PL: plural, PTPC: participle (用法が多く、他の言語での consecutive に相当する用法もある), SG: singular, TPN: TNS/PRS.NUM (tense/person.number prefix), T.PST: today past, V: verb

謝辞 クプサビニ語母語話者の調査協力者(特に Chebet Francis 氏、Mwanga Elvis 氏、Chebet Mercy 氏)に感謝を申し上げる。本研究は、以下の研究補助金により可能になった：国立国語研究所プロジェクト支援、科学研究費補助金基盤研究(C)研究課題番号：24520490、基盤研究(B)研究課題番号15H05157(研究代表者：河内一博)、基盤研究(B)研究課題番号：15H03206(研究代表者：松本曜)、National Science Foundation 研究課題番号：BCS-1535846(研究代表者：Jürgen Bohnemeyer)。本研究は、オーストラリア国立大学で開催された Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12) で2017年12月12日に Deictic directional suffix complex used for motion, associated motion, and aspect in Kupsapiny というタイトルで行なった発表から発展した。移動の実験ビデオは松本曜氏の NINJAL(-Kobe) プロジェクトで、因果関係の事象の実験ビデオは Jürgen Bohnemeyer 氏のプロジェクト Causality across Languages で使ったものである。Wallace Chafe の Pear Film のビデオ・ファイルは Mary Erbaugh 氏による。

## 参考文献

- Belkadi, Aicha. 2015. Associated motion with deictic directionals: A comparative overview. *SOAS Working Papers in Linguistics*, 17, 49-76.
- Clark, Herbert H. 1973. Space, time, semantics and the child. In Moore, Timothy E. (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, 27-63. New York: Academic Press.
- Creider, Chet A., and Jane Tapsuei Creider. 1989. *A Grammar of Nandi*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Guillaume, Antoine. 2013. Reconstructing the category of “associated motion” in Tacanan languages (Amazonian Bolivia and Peru). In Kikusawa, Ritsuko, and Lawrence A. Reid (eds.) *Historical Linguistics 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*, 129-151. Amsterdam: John Benjamins.
- Guillaume, Antoine. 2016. Associated motion in South America: Typological and areal perspectives. *Linguistic Typology*, 20.1, 81-177.
- Guillaume, Antoine. 2017. Associated motion: Australia, South America and beyond. Presented at the Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12) at the Australian National University, Canberra, Australia.
- Kawachi, Kazuhiro. 2011. Meanings of the spatial deictic verb suffixes in Kupsapiny. In Hieda, Osamu (ed.) *Descriptive Studies of Nilotic Languages (Studies in Nilotic Linguistics Vol. 3)*, 65-107. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Kawachi, Kazuhiro. 2014. Patterns of expressing motion events in Kupsapiny. In Hieda, Osamu (ed.) *Recent Advances in Nilotic Linguistics (Studies in Nilotic Linguistics Vol. 8)*, 103-136. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Kawachi, Kazuhiro. 2017. Deictic directional suffix complex used for motion, associated motion, and aspect in Kupsapiny. Presented at the Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12) at the Australian National University, Canberra, Australia.
- Kießling, Roland, and Stefan Brückhaus. 2017. Associated locomotion in Datooga (Southern Nilotic). In Kaji, Shigeki (ed.) *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics, Kyoto 2015*, 243-258. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Koch, Harold. 1984. The category of ‘associated motion’ in Kaytej. *Language in Central Australia*, 1.1, 23-34.
- König, Christa. 2006. Marked nominative in Africa. *Studies in Language*, 30.4, 655-732.
- König, Christa. 2008. *Case in Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- König, Christa, Bernd Heine, and Karsten Legère. 2015. *The Akie Language of Tanzania: A Sketch of Discourse Grammar*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levinson, Stephen C., and David P. Wilkins. 2006. Patterns in the data: Toward a semantic typology of spatial description. In Stephen C. Levinson and David P. Wilkins (eds.) *Grammars of Space: Explorations in Cognitive Diversity*, 512-552. Cambridge: Cambridge University Press.
- Montgomery, Christine Anne. 1966. The morphology of Sebei. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- O’Brien, Richard J., and Wim A. M. Cuyers. 1975. A descriptive sketch of the grammar of Sebei. *Georgetown University Working Papers on Languages and Linguistics*, 9, 1-108. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Ross, Daniel. 2017. A cross-linguistic quantitative survey of associated motion and directionals. Presented at the Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12) at the Australian National University, Canberra, Australia.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns. In Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Volume 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the 17th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Toweett, Taitta. 1979. *Kalenjin Linguistics*. Nairobi: Kenya Literature Bureau.
- Wilkins, David P. 1991. The semantics, pragmatics and diachronic development of ‘associated motion’ in Mparntwe Arrernte. *Buffalo Working Papers in Linguistics*, 91, 207-257.